

彙報

会長 上野善道

2007年度第2回常任委員会

日時：2007年10月14日（日）13:30～18:00

場所：東京大学文学部3号館6階言語学研究室

出席者：上野善道（会長）、林 徹（事務局長）、上山あゆみ、風間伸次郎、菊地康人、窪菌晴夫、田窪行則、田野村忠温、早津恵美子

オブザーバー：影山太郎（編集委員長）、井上 優（大会運営委員長）、郡司隆男（広報委員長）、呉人 恵（「危機言語」小委員会委員長）、三原健一（夏期講座小委員会委員長）、梅谷博之（事務局長補佐）

[報告事項]

(1) 新たに結んだ契約

- ・『言語研究』アーカイブ化の一環として、図書館等で来館者が閲覧した雑誌をプリントアウトすることを学会が認める旨の覚書を（独）科学技術振興機構（JST）との間で締結した。
- ・『言語研究』の新しいデザインを言語学会で自由に使ってよい旨の契約を、デザイナーの品角正紀氏（立生株式会社）と結んだ。
- ・『言語研究』の納期、金額等について中西印刷株式会社と1号ごとに契約することになった。

(2) 平成18年度科学研究費補助金に関する始末書の提出

直接出版経費（印刷費）と海外レフェリーへの郵送料等の支出額の合計が、申請書に記載してあった額より少なくなり、その減少分が当該合計の30%を超えていたが、昨年度中に変更届を提出しなかったため、始末書を提出した。

(3) 日本学術振興会による実地検査

今年度は日本学術振興会が予定している

実地検査の対象数が多いため、実地検査が予定より遅れて11月以降になる旨の連絡があった。

(4) 新しい会長印

従来の会長印とは形と大きさが違うものを新たに作り、当該印を会長が保管・使用していることが報告された。これまでは書類に捺印する際に、会長印が保管されている中西印刷と書類のやり取りをする必要があったが、これにより時間と手間を省くことができるようになった。

[審議事項]

(1) 各種委員会からの報告

・編集委員会

『言語研究』の編集・刊行状況が報告された。また、『言語研究』の新しい体裁について、投稿規程の改訂について、電子ファイル（PDF）による投稿について議論したことが報告された。

・大会運営委員会

2007年度秋季大会（於信州大学）の準備状況、2008年度春季大会（於学習院大学）のスケジュールを検討したこと、および2008年度秋季大会（於金沢大学）のシンポジウム企画に関する会場校の意向を確認したことが報告された。また、各種委員会に対して、大会企画に関する要望が出された。[別記1]参照。

・広報委員会

（独）科学技術振興機構（JST）と覚書を締結した（[報告事項] (1) 参照）。また、広報委員会の体制の変更について以下が報告された。：後藤斉氏が任期終了に伴い2007年9月に委員を退き、立石浩一氏（神戸女学院大学）と交代した。ウェブマスターはすでに8月1日に後藤氏から千葉寿氏に引き継がれている。

(2) 投稿規程の改訂

著者校正に関する条文を加えること、及び、抜刷は筆頭著者へのみ進呈することを明記することについて編集委員長より改訂案が提出され、意見交換の後、了承された。

(3) 執筆要項の改訂

電子メールによる投稿についての条文を加えること、及び、『言語研究』の紙面刷新に伴う例文表記方法の変更を条文に反映させることについて編集委員長より改訂案が出された。意見交換の後、改訂案に若干の修正を施した上で了承された。[別記2]参照。

(4) 大会発表に関する規定の改訂

大会運営委員長より「口頭発表に関する規定」「ポスター発表に関する規定」「ワークショップに関する規定」の改訂について提案があり、3つの規定を1つにまとめること、及び、規定中の具体的な発表手続きに関する部分を要項として分けること等について意見交換を行なった。

(5) 委員会内規の改訂

実態に合わない条文を削除することについて、提出された改訂案を審議した。

(6) 委員長等への必要経費補助の支払いに関する申し合わせ

事務局長に月額3万円の経費補助が支払われているが、これを減額し、同時に編集委員長、大会運営委員長、広報委員長、夏期講座小委員会委員長、「危機言語」小委員会委員長、学会ホームページ管理担当の広報委員、会長にも支払うことについて審議した。また、大会実行委員長と夏期講座実行委員長への経費補助についても審議した。なお、審議は常任委員会後もメーリングリストで継続し、11月21日に「委員長等への必要経費補助の支払いに関する申し合わせ」を作成・了承した。[別記3]参照。

(7) 小委員会の来年度活動計画

・夏期講座小委員会

2008年度夏期講座の実施計画の概略が報告された。なお、会場は当初、キャンパスプラザ京都を予定していた（『言語研究』第132号彙報2007年度第1回委員会〔報告事項〕(6)を参照）が、京都大学（文学部）に変更になった。

・「危機言語」小委員会

2008年度の活動計画について説明があ

り、第136回大会（2008年度春季大会）でワークショップ「関係節のタイポロジー：フィールドから見えてくる言語の多様性 Part 3」（仮題）を主催すること、及び、大会とは別に、危機言語の状況や危機言語研究の必要性を啓蒙する一般向けのシンポジウムを開催することが報告された。

(8) 2008年度春季大会のシンポジウム企画について

第136回大会の公開シンポジウムの講師を海外から呼ぶことについて意見交換を行なった。

(9) 大会講演者等への謝金の上限に関する申し合わせについて

「大会における公開講演、シンポジウム講師等の謝礼等について」によると、公開講演、シンポジウム講師への謝金・旅費は1大会あたり原則として総額で12万円を超えないものとされている。しかし、第136回大会（2008年度春季大会）ではそれを超える見通しであることが報告された。これについて審議し、第136回大会については12万円を超えることを認めた。また、今後も謝金・旅費が12万円を超えて必要になるときは、その都度審議することになった。

(10) 大会講演者等が会員の場合に会費未納がある場合の扱いについて

大会の公開講演、シンポジウムの講師を依頼する際に、未納会費があれば納入をお願いすることが確認された。

(11) 会費滞納者の処遇

- ・2年度分以上会費を滞納している会員のリストが配布され、リストに名前が載っている会員に会費納入を呼びかけて欲しい旨が伝えられた。また、未納者が自分は退会したものと思っている場合には、退会届を出すよう促して欲しい旨が伝えられた。
- ・今後、会費未納者の取り扱いをどうするかについて意見交換を行なった。

(12) 平成20年（2008年）度科学研究費補助金への申請

- ・平成20年度申請分より、審査対象になるための要件として、会計制度の透明性が求められることになった。これに伴い、申請時に会計規程（暫定案）を添付する必要があることが報告された。[審議事項] (13) を参照。
- ・平成20年度申請分より一度に4年度分を申請できるようになった。これに伴い単年度ごとに申請するか、それとも4年度分をまとめて申請するかについて審議した結果、4年度分を申請することになった。
- ・今後、審査対象になるための要件として、競争入札の実施が求められるようになるであろうことが報告された。審議の結果、平成20年度より競争入札を実施することになった。
- (13) 会計規程、科研費経理担当者を設けることについて
 - ・平成20年度科学研究費補助金の申請時に添付する「日本語学会会計規程」(暫定案)を作成した。
 - ・科学研究費補助金執行担当の常任委員を窪蘭晴夫氏にお願いすることが提案され、了承された。
- (14) その他
 - 2009年度の大会会場校候補について意見交換した。

2007年度第2回委員会

日 時：2007年11月24日（土）10:00～12:00

場 所：信州大学松本キャンパス全学教育機構南校舎2階大会議室

出席者：上野善道（会長）、林 徹（事務局長）、井出祥子、井上 優、上山あゆみ、荻野綱男、生越直樹、影山太郎、風間伸次郎、梶 茂樹、加藤重広、窪蘭晴夫、熊本 裕、呉人 恵、郡司隆男、斎藤 衛、坂原 茂、杉浦滋子、野田村忠温、玉岡賀津雄、角田太作、長嶋善郎、野田尚史、藤代 節、三原健一、藪 司郎、吉田 豊（以上27名）

委任状：34名

オブザーバー：庄垣内正弘（顧問）、沢木幹栄（第135回大会実行委員長）、佐藤昭裕（会計監査委員）、吉田和彦（会計監査委員）、梅谷博之（事務局長補佐）

[報告事項]

- (1) 第135回大会（2007年度秋季大会）について
 - 会長より信州大学へ謝意が表された後、大会実行委員長の沢木幹栄氏より挨拶があった。
- (2) 第136回大会（2008年度春季大会）について
 - 第136回大会が2008年6月21日、22日に学習院大学で開催されることが報告され、大会実行委員長の長嶋善郎氏より挨拶があった。なお、この大会より、発表応募の締切日が従来の3月31日から3月20日に繰り上がる。

(3) 各種委員会の活動報告

・常任委員会

2007年10月14日（日）に2007年度第2回常任委員会が開催されたことが報告された。審議内容は後の[審議事項]と重複するため報告は省略された。

・編集委員会

『言語研究』の編集・刊行状況について、及び、科学研究費補助金の計画調書を提出したことが報告された。また、執筆要項を改訂したことが報告された。主な改訂内容は、電子メールによる投稿が可能になったことを記した点、『言語研究』の判型・紙面刷新に伴う例文表記方法の変更を記した点である。[別記2]参照。

・大会運営委員会

2007年度秋季大会（於信州大学）の準備状況が報告された。口頭発表は72件（うち2件は不受理）中46件が、ポスター発表は7件（うち1件は不受理）中5件が、ワークショップは2件中2件が採択された。また、2008年度春季大会（於学習院大学）のプログラムの大枠、2008年度秋季大会（於金沢大学）のシンポジウム企画に関する会場校の意向を確認し

たことが報告された。さらに、「大会発表規程」(案)、「大会発表要項」(案)、「大会発表要旨作成要項」(案)、「予稿集原稿作成要項」(改訂案)を作成したことが報告された。

・広報委員会

『言語研究』アーカイブ化の一環として、(独)科学技術振興機構(JST)と覚書を締結したことが報告された。また、広報委員会の体制の変更について報告された。

・夏期講座小委員会

2008年8月19日(火)～24日(日)にかけて開催される夏期講座2008の実施要領(案)及び収支の試算が報告された。

・「危機言語」小委員会

2007年度の活動報告があり、ホームページの更新を行なったこと、第134回大会(2007年度春季大会)でワークショップ「活格性とはなにか? : フィールドから見えてくる言語の多様性 Part 2」を主催したこと、第135回大会(2007年度秋季大会)でワークショップ「フロンティアからの眼差し」を主催すること、『言語研究』第134号の特集論文に取り組んでいることが報告された。なお、西岡敏氏(沖縄国際大学)が新委員として加わることについて承認を得たい旨が委員長より伝えられたが、次回委員会まで保留されることとなった。

(4) 新しい会長印について

新たな会長印を作ったこと、及び当該印を会長が保管・使用していることが報告された。

(5) 会費滞納について

大会の公開講演、シンポジウムの講師を会員に依頼する際に、未納会費があれば納入をお願いする方針であることが伝えられた。また、会費を2年度分以上滞納している会員のリストが、出席者の同意を得た上で配布され、リストに名前が載っている人に会費納入を呼びかけて欲しい旨が伝えられた。なお、未納者が自

分は退会したものと思っている場合には、退会届を出すよう促して欲しい旨が伝えられた。

(6) 平成20年(2008年)度科学研究費補助金の申請について

・会計規程(暫定案)を常任委員会で作成し、科学研究費補助金の申請時に添付したこと、及び科研費経理担当者を常任委員の窪菌晴夫氏にお願いしたことが報告された。会計規程の正式な文面は次回委員会に諮る予定である。

・平成20年度申請分より、4年度分の申請をすることが可能になった。そのことを受け、今回は4年度分を申請したことが報告された。

・平成20年度に印刷業者を一般競争入札により選定することが報告された。

(7) 委員長等への必要経費補助の支払いに関する申し合わせについて

「委員長等への必要経費補助の支払いに関する申し合わせについて」の内容が報告された。なお、この申し合わせは2007年4月1日に遡って適用される。[別記3]参照。

[審議事項]

(1) 委員会内規の改訂について

原案通り承認された。これにより、現状にそぐわない条文が削除された。[別記4]参照。

(2) 投稿規程の改訂について

・投稿規程改訂案が編集委員長より出され、下記の点を除き、原案通り承認された。

・条文中に「著者」「投稿者」「執筆者」が混在していることが審議中に指摘され、その統一は編集委員会にゆだねることになった。委員会終了直後に編集委員会と協議した結果、「著者」で統一することになり、その旨が委員会の出席者に伝えられた。[別記5]参照。

(3) 大会発表に関する規定の改訂について

大会運営委員長より「口頭発表に関する規定」「ポスター発表に関する規定」「ワー

クシヨップに関する規定」を「大会発表規程」として1つにまとめると同時に、3つの規定にあった具体的な発表手続きに関する部分を「大会発表要項」「大会発表要旨作成要項」として分けることが提案され、原案が示された。また、「予稿集原稿作成要項」(改訂案)が示された。審議の結果、それぞれ原案通り承認された。なお、改訂前に使われていた「規定」「要領」という表現は「規程」「要項」に変更された。「大会発表規程」および

「大会発表要項」は巻末を参照。「大会発表要旨作成要項」は〔別記6〕を、「予稿集原稿作成要項」は〔別記7〕を参照。

(4) その他

学会連合を組織する呼びかけが日本学術会議よりあったことが報告された。言語学会としてこの呼びかけにどう対応するかを審議した結果、学会連合についての検討を行なうワーキンググループを立ち上げることとし、人選等は会長に一任することが承認された。

【別記1】 日本言語学会各委員会からの大会企画の提案について（お願い）

1. 日本言語学会の各委員会（小委員会を含む。以下同様）は、日本言語学会の大会において、会員の発表の機会提供に影響を与えない範囲で、それぞれの業務に即した内容の発表や展示を行うことができます。
2. 各委員会が大会において発表や展示を行う場合は、春季大会の場合は前年の8月20日までに、秋季大会の場合はその年の3月20日までに、企画書（趣旨と内容をできるだけ具体的に）を大会運営委員長に提出してください。
3. 大会運営委員会は、会場校とも相談しながら、提案された企画の実施が可能かどうかを検討します。
4. 可能であると判断された場合、大会運営委員会は、各委員会から提案された企画を大会プログラムに組み込みます。その際、大会運営及びプログラム編成の観点から、企画の修正を求めることがあります。
5. 各委員会の企画は、一般の研究発表と同じ手続きにより応募することもできます。その場合は一般の研究発表と同じ扱いとします。

大会運営委員会
(2007年10月14日常任委員会報告)

【別記2】 執筆要項の改訂

(旧)

3. 提出部数ならびに様式：

- a. 原稿は4部提出する。なお、図版のうち1部は鮮明なものであることとする。

5. 例文表記：例文は、丸括弧の中に通し番号を付け、独立の行に字下げして書く。

(新)

3. 原稿の様式と提出方法：

- a. 論文は郵送または電子メールで学会事務局に提出する。いずれの場合も、2週間以内に受領確認のメールが届かないときは学会事務局に問い合わせること。郵送の場合は鮮明に印刷された原稿を4部提出する。メール投稿の場合は、下記(c)の「論文本体、注、参照文献、要旨」を合わせてひとつのPDFファイルとし、「表紙」はWORDまたはテキストファイルとして別に添付する。

5. 例文表記：例文と本文の間は1行空ける。例文には丸括弧で通し番号を付け、字下げせずに左揃えとする。

(2007年10月14日常任委員会修正案可決)
(2007年11月24日委員会報告)

【別記3】 委員長等への必要経費補助の支払いに関する申し合わせ

1. 編集委員長、大会運営委員長、広報委員長、夏期講座小委員会委員長、「危機言語」小委員会委員長、学会ホームページ管理担当の広報委員、および会長と事務局長に、その任期の間、学会業務に必要な経費の補助として月額3,000円を支払う。
2. 夏期講座実行委員会における夏期講座実行委員長等への必要経費補助の支払いに関しては、夏期講座小委員会において別途定めるものとする。
3. 大会実行委員長に、大会の実施期間、実施の前5日間、および実施後の3日間、大会実施のためにおこなう業務に必要な経費の補助として、日額3,000円を支払う。

(2007年11月21日常任委員会決定)

【別記4】委員会内規の改訂

(旧)

1 委員会選出の各種委員等とその任期は次の通り。

- 東洋学研究連絡委員会委員 (3年)
- 語学文学研究連絡委員会委員 (3年)
- 九学会連合理事 (3年)
- 文部省科学研究費補助金にかかる
審査員候補者第1段 (2年)
- 第2段 (2年)

ただし、委員退任後2年以内の選出はしないものとする。また、上記委員を同時に2つ以上兼ねないものとする。

2 顧問、会計監査委員は、委員会に出席し、意見を述べることができる。ただし、議決権はない。

(新)

顧問、会計監査委員は、委員会に出席し、意見を述べることができる。ただし、議決権はない。

(2007年11月24日委員会修正案可決)

【別記5】投稿規程の改訂

(旧)

7. 投稿者は、原稿が採用された時点で「日本語学会著作物取り扱い規程」を承諾したものとす。

9. 特殊活字、図版の作成等によって多額の費用を要した場合、その費用は投稿者の負担とする。

10. 原稿は原則として採否にかかわらず返却しない。

11. 稿料は払わない。

12. 執筆者には、本誌1部と抜刷20部を無料で呈する。20部を超える抜刷は実費負担とする。

(新)

7. 著者は、原稿が採用された時点で「日本語学会著作物取り扱い規程」を承諾したものとす。

9. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。

10. 特殊活字、図版の作成等によって多額の費用を要した場合、その費用は著者の負担とする。

11. 原稿は、原則として採否にかかわらず返却しない。

12. 稿料は払わない。

13. 著者（共著の場合は筆頭著者）に本誌1部と抜刷20部を無料で進呈する。20部を超える抜刷は実費負担とする。

(2007年11月24日委員会修正案可決)

【別記6】大会発表要旨作成要項

- (1) 掲載先： 学会ホームページ（大会前）、『言語研究』（大会後）に同一内容の発表要旨を掲載する。（大会後に要旨の内容を変更することはできない。）
- (2) 内容・分量： 口頭発表／ポスター発表
- ・発表題目
 - ・発表者氏名
 - ・要旨（和文400字以内、英文120語以内、図表等を含む）
- ワークショップ（次のa、bを続けて書く）
- a) ・ワークショップ題目
- ・企画者、司会者、コメンテーター氏名
 - ・ワークショップ全体の要旨（和文400字以内、英文120語以内、図表等を含む）
- b) (各発表について)
- ・発表題目
 - ・発表者氏名
 - ・要旨（和文400字以内、英文120語以内、図表等を含む）
- (3) 使用言語： 日本語発表の場合は日本語、英語発表の場合は英語で作成する。
- (4) 書式： 学会ホームページへの掲載を考慮し、可能な限り以下の原則に従うこと。
- ・JISまたはUnicodeに準拠した文字を用いる（外字は使用しない）。
 - ・文字修飾は最小限にとどめ、また特殊な文字の使用は可能な限り避ける。
 - ・やむをえずラテン文字系の特殊文字（音声記号を含む）を使う場合は、Doulos SIL フォント（Unicode対応）を用いる。
- 参考：http://scripts.sil.org/cms/scripts/page.php?site_id=nrsi&item_id=DoulosSILfont
- (5) 提出方法： Wordファイルまたはテキストファイルを学会事務局に電子メールで送信する。送信の際は「件名（subject）」を次のようにする。
- ・口頭発表：「口頭発表要旨（筆頭発表者名）」
 - ・ポスター発表：「ポスター発表要旨（筆頭発表者名）」
 - ・ワークショップ：「ワークショップ要旨（企画者名）」
- フロッピーディスクを学会事務局に郵送するのでもよい（フロッピーディスクは返却しない）。
- (6) 提出期限： 採用通知の際に通知する。
- (7) 提出先： 日本言語学会事務局（lsj@nacos.com）
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 日本言語学会事務局
- (8) その他： 著者校正は行わない。
『言語研究』の1ページに発表要旨3件分を収める。規定の分量を超えるものは再提出を求める。

（2007年11月24日委員会決定）

[別記 7] 予稿集原稿作成要領の改訂

(旧)

予稿集原稿作成要領

締切日

研究発表採択毎に通知する。
原稿が締切までに届かなかった場合は、発表タイトルと発表者名だけを掲載する。

枚数

A4判で6枚以内とする
(可能な限り偶数ページとする。大きな図表を見開きでレイアウトしたい場合は、P.2, P.4が左、P.3, P.5は右にくると考えてレイアウトしてもよい。)

使用言語

日本語発表の場合は日本語、英語発表の場合は英語で作成する。

書式

※タイトル、氏名を1ページ目の上に入れる。
※左右2センチ、上2センチ、下3センチの余白をとる。
※ページ番号は、右下に鉛筆で記入する。
※その他は自由。字数制限もなし。
※B5判に縮小されるので、文字のサイズや行間等にはご注意ください。

送付先

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
日本語学会事務局

(新)

予稿集原稿作成要項

(1) 分量:

口頭発表/ポスター発表:A4判で6枚以内(厳守)

ワークショップ

企画者:A4判で2枚以内(厳守)

発表者:(1発表につき)A4判で6枚以内(厳守)

可能な限り偶数ページとする。予稿集印刷時には左ページ始まりになるので、図表等を見開きで掲載する場合は注意すること。

(2) 使用言語:日本語発表の場合は日本語、英語発表の場合は英語で作成する。

(3) 書式:

a) 発表題目、氏名を1ページ目の上に入れる。

b) 左右に2センチ、上に2センチ、下に3センチの余白を設ける。

c) ページ番号は、右下に鉛筆で入れる。

d) その他は自由。字数制限もなし。

e) 原稿はそのまま写真印刷される。校正は行わない。

f) 予稿集印刷時にはB5判に縮小されるので、文字のサイズや行間等に注意すること。

g) 予稿集は白黒印刷なので、カラー原稿や色の濃淡はきれいに表現できない場合がある。

(4) 提出方法:原稿を2部、学会事務局に郵送する。

(5) 提出期限:採用通知の際に通知する。

(6) 提出先:

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
日本語学会事務局

(2007年11月24日委員会修正案可決)

2007年度第2回「危機言語」小委員会

日時：2007年11月24日（土）13:00～14:00

場所：信州大学松本キャンパス全学教育機構南校舎2階大会議室

出席者：

委員：遠藤 史，金子 亨，呉人 恵（委員長），
佐々木冠，白井聡子，白石英才，田村すゞ子，千葉庄寿，角田太作，中山俊秀，稗田 乃，宮本律子

オブザーバー：西岡 敏

[報告事項]

(1) 秋季大会特別展示の準備状況

担当の遠藤氏から、2007年11月25日（日）に開かれる「危機言語」小委員会主催の特別展示「フロンティアからの眼差し」についての準備が滞りなく進められていることが報告された。

(2) 『言語研究』の危機言語特集への投稿について

『言語研究』134号（2008年9月予定）の「危機言語」特集に向けて、「危機言語」小委員会からの推薦で3名が論文投稿の準備を進めていることが委員長から報告された。

[審議事項]

(1) 日本言語学会第136回大会ワークショップについて

テーマを「関係節のタイポロジー：フィールドから見えてくる言語の多様性 Part 3」（仮題）とし、各地の危機言語に見られる多様な関係節構文を紹介することに

より、関係節のタイポロジカルな整理分析を行なうとともに、日本語の関係節構文の位置づけを試みる方向で行なうことについて審議され、同意がなされた。発表者については加藤重広（日本語）、加藤昌彦（ポー・カレン語）、角田太作（オーストラリア先住民諸語）、呉人恵（コリヤーク語）各氏は承諾済み、市橋由美子氏（ユーマン語族）は検討中であることが委員長から報告された。

(2) シンポジウム開催について

2009年2月頃には一般市民に向けた危機言語の啓蒙的なシンポジウムを開催することについて、その具体的内容の審議がなされた。様々なテーマについての提案があったが、決定には至らなかった。

夏期講座小委員会

[活動報告]

2007年度第1回以降の夏期講座小委員会は、全員が集まる会議を開催しておらず、審議すべき事項が生じるとにメーリングリストで行なっている。決定した事項は以下の通りである。

- (1) 夏期講座2008は、8月19日～8月24日の6日間、京都大学を会場として開催する。なお、宿泊を希望する参加者には生協のコープイン京都を斡旋する。
- (2) 開講する12科目について全て講師が決定した（詳細は夏期講座ホームページ参照）。
- (3) 橋本喜代太氏を実行委員長とする実行委員会を立ち上げた。

第 135 回大会

期 日 2007 年 11 月 24 日 (土)・11 月 25 日 (日)

会 場 信州大学

公開講演 11 月 25 日 9:30～11:45

音韻論と音声学を結んで—Laboratory Phonology の動向と展望—
 方言文法研究の動向と展望

近藤真理子
 渋谷 勝己

公開シンポジウム 11 月 25 日 13:10～15:40

「否定と言語理論」

イントロダクション

否定と統語論

否定と意味論

否定と語用論

三藤 博
 加藤 泰彦
 今仁 生美
 吉村あき子

口頭発表 11 月 24 日

◦ A 会場

- (A 1) 13:00～ 非意図的な出来事における他動詞使用と「責任」意識 吉成 祐子
 一日・韓語の対照を通じて— パルデシ ブラシャント
 鄭 聖汝
- (A 2) 13:35～ 日韓語の動詞複合形成モデルの構築—「食べる /
 meogda」を後項動詞とする例を中心に— 李 忠奎
- (A 3) 14:15～ 韓国における外来語の使用実態と受容要因 梁 敏鎬
- (A 4) 14:50～ 韓国語慶尚道方言の外来語アクセント再考 窪 蘭 晴夫

◦ B 会場

- (B 1) 13:00～ 中国語における目的語の「特定性」と語順制限 徐 佩伶
- (B 2) 13:35～ 日本語の直示的複数表示「たち」 金子 真
- (B 3) 14:15～ 現代日本語における多重否定極性項目構文について 朴 江訓
- (B 4) 14:50～ 「誰も何も食べなかった」—限定詞の共起における否
 定の共有と否定重複— 中村ちどり

◦ C 会場

- (C 1) 13:00～ 日本語の目的語コントロール構文と目的語転位 船越 健志
- (C 2) 13:35～ 日本語における「顕在的」長距離繰上げ 水口 学
- (C 3) 14:15～ 日本語軽動詞構文におけるカタ名詞化—Fukui and
 Sakai を支持する論証— 内芝 慎也
- (C 4) 14:50～ 根源的モダリティと認識的モダリティの統語構造 秋庭 大悟
- (C 5) 15:40～ 素性照合とそのタイミング 依田 悠介
- (C 6) 16:15～ 弱フェイズにおける素性の引継ぎについて 石川 弓子
- (C 7) 16:55～ 日本語の「認識的「と」節」構文について 浅田 裕子
- (C 8) 17:30～ 日本語に於ける動詞句削除の欠如とその帰結に関する
 覚書き 星 浩司

◦ D 会場

- (D 1) 13:00～ ゲルマン諸語の非制限節における関係節化詞のタイプ 稲田俊一郎
 と関係節構文の派生・構造
- (D 2) 13:35～ Extraction from infinitival clauses in Ulster Irish Dónall P. Ó BAOILL
 Hideki MAKI

- (D 3) 14:15 ~ The internal structure of quantified phrases, focus reading, and scrambling in Japanese NAKAMURA Koichiro
- (D 4) 14:50 ~ 現代日本語の主格・属格交替の ANOVA 分析—介在効果とその含意— 牧 秀樹
坪内 一也
浜壽 通世
- (D 5) 15:40 ~ 状態動詞と形容詞の意味構造の違い 松井夏津紀
- (D 6) 16:15 ~ 英語における Tough 構文, 中間構文にみられる動詞の意味的性質について 金澤 俊吾
- (D 7) 16:55 ~ 「into を伴う到達経路表現」について—構文文法的な視点から— 松山 哲也
- (D 8) 17:30 ~ 反義性に関する認知意味論的考察 松本 曜
- E 会場
- (E 1) 13:00 ~ シダーマ (シダモ) 語の格のシステム 河内 一博
- (E 2) 13:35 ~ シンハラ語の動詞分類と動詞の形態的特徴の関係
ディルルクシ・ラトナーヤカ
- (E 3) 14:15 ~ 台湾ブヌン語の, 「望ましくない状態」を表す形容詞の派生に用いられる接頭辞 matu—形態分析と意味記述— 野島 本泰
- (E 4) 14:50 ~ バンティック語とタラウド語のヴォイスシステムの比較—使役動詞を中心に— 内海 敦子
- (E 5) 15:40 ~ 保安語積石山方言における指示詞の現場指示用法について 佐藤 暢治
- (E 6) 16:15 ~ 満洲語文語の三人称代名詞 山崎 雅人
- (E 7) 16:55 ~ カドリ語における重複的構造 稲垣 和也
- (E 8) 17:30 ~ ブルシャスキー語の反響語 吉岡 乾
- F 会場
- (F 1) 13:00 ~ 指示詞から感動詞へ 岩田 一成
- (F 2) 13:35 ~ 副詞としての「普通に」の用法について 大野 早苗
- (F 3) 14:15 ~ 「たちまち, あっという間に, またたく間に」の意味分析—ベースとプロファイルの観点から— 李 澤熊
- (F 4) 14:50 ~ 前提条件操作の限界—「よろしかったでしょうか」の語用論分析— 首藤佐智子
- (F 5) 15:40 ~ アカン語の名詞の声調 古閑 恭子
- (F 6) 16:15 ~ 連濁の形式的アナロジーモデル 浅尾 仁彦
- (F 7) 16:55 ~ 聴取条件が閉鎖音・摩擦音の知覚しやすさに与える影響について 竹安 大
- G 会場
- (G 1) 13:00 ~ 岩手県遠野方言の推量・意志表現 高田 祥司
- (G 2) 13:35 ~ 琉球語のクリティック—伊良部島方言の記述から— 下地 理則
- (G 3) 14:15 ~ 補助動詞「おく」の非意志的用法の3構文—地理上の分布と文法体系内でのつながり— 山部 順治
- (G 4) 14:50 ~ 放っておけない「V-テオク」構文—東・南・中央アジア諸語における「PUT/KEEP」の文法化の記述的研究—
パルデシ プラシヤント

(G 5)	15:40 ~	I think ~ p. と I don't think p. の習得順序について	森 貞
(G 6)	16:15 ~	The effects of transparency and context on L2 idiom interpretation	Priscilla ISHIDA
(G 7)	16:55 ~	Differences in discourse comprehension strategies for L2 (second language) Japanese as employed by pair-matched L1 (first language) Chinese and Korean speakers	TAMAOKA Katsuo MIYAOKA Yayoi LIM Hyunjung KIM Sujin SAKAI Hiromu

ワークショップ 11月24日

◦ A 会場

「解放的」語用論の展開	企画	藤井 洋子
—母語話者視点からのチャレンジャー	司会	堀江 薫
	指定討論者	井出 祥子
共同作業における合意形成		藤井 洋子
—日本語・英語・韓国語における「場」とことば—		金 明姫
合意形成会話に基づくインタラクシヨンスタイルの類型化について		片桐 恭弘
アフリカ狩猟採集民グイの談話分析から見る〈性のトポグラフィ—〉		菅原 和孝

◦ B 会場

否定呼応現象から探る日本語文構造の特質	企画	片岡喜代子
—理論研究と歴史研究から見えるもの—	司会	江口 正
現代日本語シカのふるまいと統語的条件		片岡喜代子
「～シカ～ナイ」構文の歴史—「係助詞」性に注目して—		宮地 朝子
歴史的観点から見た否定の作用域		衣畑 智秀

ポスター発表・特別展示 11月25日

◦ H 会場

シダーマ (シダモ) 語の関係節の形成のパターン		河内 一博
日本語における右方転移構文と分裂文の機能		中川奈津子
		浅尾 仁彦
		長屋 尚典
限界性による「V + かける」構文の分析		張 楚榮
自動言語判定手法の開発とそれを利用したインターネット上の言語分布に関する調査		児玉 茂昭
		三上 喜貴
	チュー ユー チョーン	
「が・の・を交替」が可能な文の助詞の選好性の調査		藤原 崇

◦ I 会場

特別展示「フロンティアからの眼差し」	企画	「危機言語」小委員会
ニヅフの ^{いま} 現在		金子 亨
ダバ語の方向接辞		白井 聡子
チノ語悠楽方言の動詞複合形式		林 範彦
琉球語宮古池間方言の動詞の時間・様相特性		林 由華

◇退 会

国内通常会員 27 名

海外通常会員 6 名

国内団体会員 2 件

国内学生会員 8 名